

◆2021年2月第2週のメッセージ

■日時：2021年2月14日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「キリストに在る交わりの日々生きる。」

■聖書：新約使徒言行録2：43-47（新p217）

■讃美歌：7「ほめたたえよ、力強き主を」・482「わが主イエス」

お早うございます。

立川教会創立70年を覚えての主日礼拝となりました。

初代牧師であった江口忠八先生が書かれた『日本基督教団立川教会小史Ⅰ』の冊子に記載されている教会創立前後の事情は次の通りです。

まず冒頭にコリントの信徒への手紙一のパウロの言葉から、「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし、成長させて下さるのは、神である」が引用され、続いて頁を開くと以下のようにあります。

「日本基督教団東京教区は、昭和25（1950）年度において、東京都立川地区に教会建設のはたらきをすることになり、その責任者として教団牧師江口忠八が選ばれるに至った。

これより後、江口は再三再四立川に出かけ、当時立川市錦町在住の山本外二の紹介により、ようやく立川市柴崎町2丁目176番地に8畳・2畳・4畳半の家を見つけてこれを購入した。代金15万円（外に謝礼）。代金（謝礼）は、主として江口ハナ保管の、米国宣教師らの贈与による伝道資金に基づく。これは昭和26（1951）年1月26日のことで、以後同所を住居兼伝道所として、伝道を開始した。」

このような記述の後、翌週の2月4日の主日に最初の祈祷会が行われ、さらにその翌週の2月11日に最初の礼拝を持つに至ります。礼拝に集まった者は13名でした。

しかし、それからわずか1か月後の3月31日、伝道所は早くも第2種教会となり、日本基督教団立川柴崎町教会と称し、主任担任教師に江口忠八牧師がなります。そして、翌1952年3月、担任教師として江口ハナ牧師が就任しました。ご夫妻による共同牧会です。

創立から3年後の1954年、教会は現在の地に移ります。時を同じくして教会員も増えたことから第1種教会となり、名前も立川教会に変わりました。

その後です。創立からの10年間、教会の躍進は目覚ましいものがありました。昭和36（1961）年度の教会員は創立当初の13名から何と64名へと5倍に、礼拝出席者は11名から31名へと3倍に飛躍します。教会学校も在籍45名、出席27名です。

江口忠八・ハナ先生は、初代と2代の牧師として、お二人で合わせて31年間この教会を牧会されました。続く柏井宣夫先生を経て、第4代の牧師となられたのが愛澤豊重先生です。愛澤先生は15年間、第5代の高田和彦先生は11年間、この教会を牧会されました。記録を見ると、愛澤先生の時代の1992年、礼拝出席者が年間平均38名とあります。この数字が、立川教会70年の歴史の中で、最も多い時であったと思います。高田先生の後には梁在哲先生が3年、無牧の時代が1年、そして2016年3月に私が招聘され、間もなく6年目を迎えようとしています。

以上が、立川教会70年の歴史です。

そして、今、改めて70年の歳月の重さを思うのです。

70年の間に立川教会の会員となり、この教会の働きに加わられた方は281名を数えます。会員にならずとも、一度でも礼拝に出席された方、あるいは奉仕をされた方を数えれば、その数は281名の数倍に上ります。そのお一人おひとりを、神様はどれだけ愛し、大切にされているかを思います。

牧師の務めの一つは、それらの人々に対する神様の思いを知り、それを伝えることです。

一人ひとりの教会員、奉仕者らを、牧者として、こよなく尊い存在として受け止め、神の国が訪れることを共に待ち望むことです。そして、イエス様がいつ来られても良いように、門番としての務めを共に担うことです。

門番としての務めとは、先週お話ししたように、「目を覚ましている」ことです。

目を覚ましているとは、ただ黙って眠らずにいることではありません。

イエス様が再び来られるまでの間に、神様から託された務めを行うことです。

託された務めとは、未だキリストの福音を知らぬ人々に、福音を告げ知らせることです。

教会の扉を開け、人々を招き入れることです。

それでは、教会の扉を開け、人々を招き入れるために、私たちにはどのような準備が必要なのでしょうか？

第一に、礼拝で、福音の真理が語られていることです。

第二に、教会の交わりに、温かさがあることです。

温かさがあると言うことは、私たちの交わりの中に、お互いへの尊敬と愛情が滲み出て来ることです。ある方の奨励の言葉を借りるなら、キリストの香りを漂わせていることです。

第二の教会の交わりの温かさとも関わり、私たちの教会の今年度の主題聖句は、使徒言行録第2章46-47節の御言葉でした。

そこでは、初代教会の信徒たちの様子が記されています。

46：毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、

47：神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

私は、ここに、私たちが目指す教会の交わりの原点があると思います。

「ひたすら心を一つにして神殿に参る」。これは私たちの礼拝の姿です。

「喜びと真心をもって一緒に食事をする」。私たちの毎主日の昼食会の姿です。

そして、後一つ、「民衆全体から好意を寄せられる」には、何が必要なのかです。

このことが出来れば、「主は救われる人々を日々仲間に加え一つに」して下さると記されています。私たちになお一つ必要なもの、それは“世にはない交わり”だと思います。

そのような交わりが出来ているかいないかではなく、私たちが真剣にそれを望み、それを目指しているのかどうかです。

”世にはない交わり”を実現するには、どのようにすれば良いのでしょうか？

私にとって、教会員お一人おひとりは、かけがえのない方々です。

全ての方に、素晴らしい賜物があります。

何気ないことの中に、素晴らしい発見が与えられます。

ある時のことでした。

ある方が、ご自分で使われたコーヒーカップを黙って洗われました。

後で気が付いたのですが、本当に綺麗に洗われていました。

使ったカップを自分で洗う。当然と言えば、当然かも知れません。

しかし、私にとっては、その方が使ったカップを、私が洗わなければならないかなと思っていたこともあり、予期しない驚きであり、喜びであり、感謝でした。

その綺麗さは、その方のお仕事によって与えられた賜物であると思いました。

私は、この5年間、多くの教会員に、責任感の強さを見出し、黙々と励まれる謙虚さを見て来ました。それらは素晴らしいものでした。

又、この教会は、本当に多くの教会員以外の方にも、その働きが支えられて来ました。

奏楽者が4人もいる。そして全員が他教会員であるなど、聞いたことがありません。

料理教室もそうです。ガスオーブンを寄贈して下さり、責任をもって料理教室を担当して下さる方が与えられています。

中国語礼拝の通訳の方にしても、懐かしい歌を歌う集いのピアノ伴奏の方にしても、神様は、私たちが試みる新しい働きを、全て、一つも欠けることなく導き、支え、祝福して下さいました。

夕礼拝にしてもそうです。

昼間の礼拝ではなく、夕礼拝を本当に必要として下さる方の礼拝となりました。

幾つも幾つも、次々に与えられる神様の御業を思うのです。

そして、今、70周年の記念すべき時を迎えて、神様の祝福に応える意味でも、これまで私たちが一度も成し得なかった一つの業に取り組みたいと考えています。それは、ある意味での開拓伝道と言っても良いかも知れません。

コロナ禍の試練の中にあって、ある時、次第に私たちの記憶から忘れ去られて行く二つの教会のことが私の心に浮かび始めました。3・11によって事故を起こした、東京電力福島第一原子力発電所に最も近い二つの伝道所のことです。

心に浮かび始めた理由は、震災翌年の2012年から5年間、私は教団の東日本大震災救援対策本部担当幹事として、被災した教会の復興事業に携わっていたからだと思います。その思いは、日を追って私の心の中に強くなり、そして、私たち立川教会の70周年の記念事業として、この二つの伝道所のことを心に覚えたいと思うようになりました。

二つの伝道所の一つは、原発より20km圏内のため、長く強制避難地域となった福島県双葉郡の浪江伝道所です。あと一つは、浪江の次に原発から近い、同じく南相馬郡小高区にある小高伝道所です。

浪江伝道所は、かつては薔薇の教会と呼ばれていました。浪江を開拓伝道した宣教師によって、教会の入り口の門にはバラの花が咲き乱れていたことからそう呼ばれていたのだと思います。

しかし、3・11以降今に至るまで教会は閉鎖されています。教会員は一人もいません。昨年11月、様子を見て来ました。教会の敷地には雑草が生い茂り、見る影もありませんでした。教会内も、会堂の椅子だけは元に戻されていましたが、集会室の机や本棚は倒れ、割れたガラスも散乱したままでした。

小高伝道所も、浪江伝道所と同じく原発から20km圏内にあり、強制避難区域の立ち入り禁止に指定されていました。しかし、浪江より早く立ち入り禁止が解除された結果、震災

から8年たった一昨年1月、月に一度だけですが、第4主日の午後に礼拝が再開されています。しかし、かつてあった教会附属幼稚園は閉園となり、教会員は一人だけです。

立川教会の役員会の皆さんの承認を受け、この4月から、第4週、私はこの二つの伝道所を訪れます。そして、小高伝道所で礼拝の奉仕をしつつ、閉鎖された浪江伝道所では雑草を刈り取り、部屋を片付け、再び礼拝の明りを灯したいと祈るのです。

教会には3つの使命があります。

第一の使命は、世界の創造主である神様を指し示し、世に神様が生きて働かれていることを知らせ、その独り子である主イエス・キリストの救いの業を知らせることです。

第二の使命、それは、この世の現実を理解し、世と深く関わり、信仰に立って世に対し、然りと否とを言うことです。

そして、第三は、世の現実には踏み入り、世に仕え、奉仕し、喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣くことです。

立川教会は、この3つの使命に常に立ち帰りつつ、70周年のこの時に、被災した浪江・小高伝道所を、立川教会の開拓伝道所のように覚えて行きたいと思うのです。そして、その先頭に私が立ちたいと思います。

70周年を覚えると言うことは、この70年の歩みへの神様の導きと支えを感謝すると共に、イエス様がその生涯を通して歩まれた伝道の業へ、私たちも又心を新たにして、歩み出す決意をする時でもあります。

創立期に、開拓伝道の任を負われた江口先生が記されたパウロの言葉、「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし、成長させて下さるのは、神である」、この言葉を心に刻みながら、立川教会のこれからの80周年に向かう明日への一步を踏み出したいと思いません。

祈りましょう。